Newsweek の『特別記念号』に掲載されたエリザベス女王を指し示す言語表現について

Linguistic Expressions Referring to Queen Elizabeth Ⅱ in the *Newsweek Special Commemorative Issue – The Diamond Queen 60 Years of Elizabeth Ⅱ*

田　淵　博　文

はじめに

平成24 年（2012年）はエリザベス女王即位60周年の記念すべき年であり、60周年を祝って、ニューズウィークの『特別記念号』（*The Diamond Queen 60 Years of Elizabeth II*）が2012年夏に発売された。イギリス王室も女王やキャサリン妃の人気で、世論調査では国民の王室支持率は80% までに達した。しかし日本において、英文科の大学生でもあまりエリザベス女王について詳しく知らないのが現状ではなかろうか。イギリス文化研究において、女王は無視できない人物の一人である。

エリザベス女王がイギリスにおいていかに大切な人物であるかということを実証するために、本稿において女王を指し示す言語表現に注目し、イギリス社会において女王の果たしている役割や偉大さについて考えてみたい。また、ニューズウィーク誌に掲載された特集記事において、女王を指し示す言語表現に、書き手（記者）の微妙な心的態度が現れている例も挙げて自論を述べてみたい。

まず、女王を指し示す言語表現の例文を以下に 33 列挙する。（太文字は筆者）

［以下（　　）の中に引用したページ番号、その後に書き手（記者）の名前を記す。］

I. エリザベス女王を指し示す言語表現の例文

1．**The Diamond Queen** 60 Years of **Elizabeth II**（表紙）

2．**Queen Elizabeth II** and Prince Philip brave the stormy seas to celebrate her 60 years on the throne. (1)

3．But did **this tiny octogenarian** and her 90-year-old husband once sit down upon them? Of course not. (2) Tina Brown, Editor in Chief

4．And why on her Diamond Jubilee, love of country and love of **Queen Elizabeth II** fused into one joyful celebration of a job so flawlessly done. (2)

5．It's taken six decades to pull off, but **this queen** has completely reinvented–and

reenergized–the British monarchy. (9) Robert Hardman

6. Sixty years into her reign, **Elizabeth** has reinvented the monarchy. (11)
7. It is the royal paradox: we want **our queen** to be just like us, but we also want her to be entirely different. (12) Jacqueline Williams and Lizzie Crocker
8. Whether you calibrate these things in terms of street parties (double the number for the 2011 wedding), television schedules, or flag sales, Britain's love for **its first lady** is back up near coronation levels. (12)
9. **The queen**, who is also **the supreme governor of the Church of England**, has been **the first reigning monarch** to embrace all faiths as equals, to visit mosques, Hindu temples, and the Vatican. (13)
10. It showed that t**he longest-lived monarch in British history** remains at the top of her game. (13)
11. **The queen**, encouraged by the Duke of Edinburgh, understood the need for a rethink.(14)
12. She may be **the most famous woman in the world**, yet she retains the modesty that has been a personal trait all her life. It remains one of her greatest assets. (15)
13. **This queen** is **the most media savvy in history**. (18) Piers Morgan
14. **The boss** is, after all, **the queen–the single most powerful person in the land**. (19)
15. The royals decamped to Balmoral in Scotland as the nation descended into grief, and **Her Majesty** was personally attacked for the first time anyone could remember for refusing to lower the flag at Buckingham Palace and for making no personal address to the nation. (19)
16. "SPEAK TO US, **MA'AM**, YOUR PEOPLE ARE SUFFERING." (19)
17. **The 86-year-old queen**, in her ivory moire outfit, stood gamely on the top deck of her royal barge to wave at the 20-deep crowds lining the banks for the river pageant. (24) Simon Schama
18. This is why the bond between **queen** and people, on show throughout the jubilee, is not in the least bit fake – and why, from generation to generation, it shows such astonishing powers of resilience and adaptability. (31)
19. **A smiling queen** is rare indeed. While she doesn't often let emotions get past her regal composure, she has lately given in to public displays of joy. (33) Juliet Nicolson
20. **Queen Elizabeth** went into mourning and rode around her grounds following the Queen Mother's death in 2002. (34)
21. Yet ever since his wife's accession to the throne in 1952, he has been required to address her as "**Ma'am**" in public and bow whenever she enters a room. (41) Philip Eade
22. **The queen** and Prince Philip succumb to public pressure and visit a Diana memorial in

London. (51) Robert Lacey

23. Of Corgis and Ponies **Elizabeth's** passions outside the palace. (58) Caitlin Dickson
24. Her **Majesty**, Inc.... Still, **the queen** and her husband, Prince Philip, are very aware that the royal family exists only through the indulgence of the British people, who are, for all the pomp of recent days, "subjects" in name only. (62) Tom Sykes
25. **Culture Queen**... She is **the most recognizable woman in the world** – and **an endless source of inspiration**. From films to fashion to art, **Elizabeth** has been **an unexpected cultural icon**. (77) Robin Givhan
26. **The queen**, of course, is no ordinary woman. She is **a central figure in the history of a country**. (81)
27. WHAT TO SAY First: Address her as "**Your Majesty**" Thereafter: Address her as "**Ma'am**" (84) Abby Haglage
28. Michelle Obama shocked onlookers when she put her arm around **the queen** in 2009, but in her defense, **Elizabeth** started it. (85)
29. **The queen** has been **an artistic inspiration**, for better and worse. (90) Blake Gopnik
30. **Queen Elizabeth II** is "t**he most portrayed public person in history**". (90)
31. She's **the commander in chief of all armed forces in the U.K**. Declarations of war and peace are done in her name. (92) Abby Haglage and Jacqueline Williams
32. **Her Majesty** also holds the titles Duke of Lancaster and Duke of Normandy. (92)
33. She is **the only British monarch in history properly trained to change a carburetor**. (93)

II. 例文のエリザベス女王を指し示す言語表現に関しての解説と意見

それでは、1の例文から番号順に言語表現に注目し解説を加えることにする。

1．は、即位60周年であるので、The Diamond Queen 60 Years of Elizabeth II と表現されている。

2．は、Queen Elizabeth II と表現されている。平成22 年６月3日に1000隻のボートがテムズ河に集結しこの即位60周年の式典を祝った。25マイルの水上のパレードである。当日は風も強く雨も吹きつける（pelting rain）中、女王とフィリップ殿下は甲板に勇ましく立ち、テムズ河を船（royal barge）で航海している。Brave（立ち向かう）という単語を用いて２人の堂々とした姿を際立たせている。

3．は、this tiny octogenarian と表現されている。記事の内容は好意的である。お二人が体が冷える寒い中、them つまり scarlet thrones（緋色の玉座）に腰かけることなく立ち続けられるであろうと断言している。 この記事を書いた Tina Brown は、*Newsweek* の編集長である。彼女はイギリス政府から CBE を叙勲されている。またご主人の

Harry Evans も Sir の称号を有し、2005年の7月には夫婦そろって園遊会にも招待されている。しかし、エリザベス女王に対して tiny（小柄な）という単語を用いているのは非礼である。女王の身長は5フィート4インチ（約160センチ）であるが、あえて tiny という単語を用いる必然性は全くないような気がする。例文の3と4は、Tina Brown の記事である。

4．は、２と同じく Queen Elizabeth II と表現している。Love of country と love of Queen Elizabeth II が and で並列に結ばれている。「60周年記念日に国に対する愛と女王に対する愛が融合して、ひとつの完璧に遂行された楽しい式典になった」と書かれている。

5．は、this queen と表現されている。「この女王がイギリス王室を完全に reinvented（作り変え）、reenergized（活性化させた）」と好意的にとらえている。女王の海外への公式訪問の回数が261回、のべ116カ国にものぼる。また、the media monarch と言われるほど、メディアに向けて精力的に業務を遂行している。 例文の5と6は Robert Hardman の記事である。

6．は、Elizabeth と表現されている。日本では皇后陛下のことを美智子（Michiko）とは絶対に表記しないであろう。それゆえ日本人の筆者（私）には、女王にたいして first name を用いることは非礼な表現のように思えてならない。しかし、例文の6、23、25、28にも Elizabeth という表記が数回用いられているので、親しさを示すくだけた表現の一例としてアメリカの *Newsweek* では許容されているのだろうか。ここでも reinvented という表現を用いている。

7．は、our queen と表現されている。Our という単語が用いられ、イギリス国民から慕われていることがわかる。女王に国民のようであってほしいという思いと国民とは全く異なる存在でいてほしいという思い（royal paradox）の二つが国民にあるようだ。例文の7から12は、Jacqueline Williams と Lizzie Crocker の記事である。

8．は、its first lady と表現されている。当然のことだが、イギリスを代表する第一人者である。2011年の4月29日に Westminster Abbey で1900人の招待客を招き、ウィリアム王子とキャサリン妃の結婚式が執り行われたが、路上パーティーに参加した人数が約300万人であった。今回の女王の60周年の式典には2倍の約600万人が参加している。「路上パーティー、テレビの番組予定、国旗の売上数などから判断して、国民の女王に対する愛が戴冠式（1953年6月2日）のレベルにまで戻った」と記されている。

9．　は、the queen、the supreme governor of the Church of England、the first reigning monarch と表現されている。女王はイギリス国教会の最高の長である。しかしこの例文にあるように、「すべての宗教を平等なものとして取り入れた最初の現君主である」と記されているように、イスラム教の寺院であるモスクやヒンドゥー教の寺院やローマ教皇庁（ 1961年と1980年）にも分け隔てなく訪問している。近年では2011年の5月にカトリックの国であるアイルランド共和国にも初めて公式訪問している。ま

た、ローマ教皇も1982年と2010年にイギリスに公式訪問している。Reinvented や reenergized という単語が例文の5や6で用いられていた理由がこの女王の訪問からもイギリスは良い方向に変わってきていると言えるのではなかろうか。

10. は、the longest-lived monarch in British history と表現されている。「イギリス史上最も長続きしている王室が一番である」と好意的に記されている。
11. は、9と同じく the queen と表現されている。「ダイアナ妃の死に関して、夫であるエディンバラ公から促され女王が再考の必要性を理解した」という内容である。故ダイアナ妃と女王とは不仲説もあり王室存続に対して危機感を感じていた頃である。
12. は、the most famous woman in the world と表現されている。確かに女王はマスコミなどを通じて、世界で一番有名な女性であることは間違いない。しかし、「生涯を通じて人格上の特性である謙虚さを有していて、それが最も素晴らしい資質の一つになっている」と記されている。謙虚さや我慢強さを誇りにしているイギリス人の国民性が見て取れる。
13. は、5と同じく this queen と the most media savvy in history と表現されている。「この女王は歴史上最もメディア通である」と記されている。クリスマスの日の午後3時からのテレビによる国民に向けての5分間の挨拶も在位期間中、１回行われなかっただけで今日までずっと続いている。例文の13から16は、Piers Morgan の記事である。
14. は、the boss と the queen と the single most powerful person in the land と表現されている。The boss というくだけた表現であるが、女王を指し示す言葉としては相応しくない気がする。The monarch の意味で用いていると思われるが、非礼に聞こえる。「女王は国（イギリス）において、まさに最も影響力の強い人物である」と記されているように、最上級をさらに修飾する single が用いられ強調されている。
15. は、Her Majesty と表現されている。例文の11の記事と同じような内容である。ダイアナ妃の死で国民が喪に服していた時に、王室の人たちがスコットランドのバルモラル城に転居していた頃である。女王が今まで味わったことがないような非難や攻撃を国民から初めて浴びたのである。理由はバッキンガム宮殿の国旗を降ろすことや国民に向けての個人演説をすることを女王が拒否したからである。結果は女王が再考し夫と一緒にロンドンに馳せ参じ、哀悼の意を示したことで、国民の怒りも少しは鎮まったのは言うまでもない。
16. は、ma'am と表現されている。この例文は大衆紙の *Daily Mirror* の第１面の見出しである。「女王様、国民に話しかけてください。あなたの国民は苦しんでいますよ」と女王を挑発している。Ma'am はぶしつけで非礼な表現であり、Her Majesty とするのが礼儀である。大衆紙は一般大衆を扇情することが目的であるので、このように ma'am を用いて女王を挑発するような表現になっている。
17. は、the 86-year-old queen と表現されている。Queen の前にあえて86歳という年齢を

記した理由は、例文２と３で述べたように、ご高齢にもかかわらず船の甲板の最上段に勇敢に立ち、テムズ河岸の一大絵巻を一目見ようと集まった20の層をなす（約100万人の）群衆に向かって手を振っている女王のりりしい姿を強調するためでもある。また、女王が乗船していた royal barge の名前は「The Spirit of Chartwell（Chartwell の精神）」である。Chartwell は Kent 州の Westerham 近くにある Winston Churchill (1874-1965) がかつて住んでいた大邸宅（現在は博物館）の名前である。女王が一番尊敬していた人物がノーベル文学賞の受賞者でユーモアセンスのある名宰相であった Winston Churchill であったことを考えると船の命名に納得がいく。例文の17と18は、Simon Schama の記事である。

18. は、queen と表現されている。The bond between queen and people とあるように、女王と国民との絆は決して偽物ではなく正真正銘の本物である。Not in the least bit fake と強調され、「何世代にもわたってすばらしい回復力と適応力を示している」と記されている。女王が60年間にわたってイギリスを健全に統治し続けていること自体、王室に回復力と適応力があることを実証している。

19. は、a smiling queen と表現されている。イギリス人の辛抱強さを示す「‘Keep a stiff upper lip’（何事にも平然としている）」という表現があるが、国民以上に女王たるものは感情を表に出さないものである。女王を示す言葉として有名な、‘Keep calm and just do it!’という表現がある。この表現から、女王が落ち着いて、淡々と仕事をこなしていることがうかがえる。この例文では「最近、女王が人前で喜びの表情を見せるようになった」と記されている。競馬好きで夙に知られている女王の（持ち）馬を真剣に応援している姿がマスコミに何度も取り上げられてきた。3年前（2011年）にイギリスで首脳会談があった時にも、おしゃべりなイタリア首相を叱っている女王の姿がテレビで報道されたこともある。例文の19と20は、Juliet Nicolson の記事である。

20. は、Queen Elizabeth と表現されている。この例文は女王が、2002年に Queen Mother（皇太后）が101歳で逝去された時、喪に服していた時の描写である。女王は Windsor 城の敷地内を riding hat もかぶらず、head scarf のみで馬にまたがり散策している。女王が corgi 犬をこよなく愛していることは有名であるが、同様に愛馬に騎乗することで母親のなくなった悲しみや辛さを和らげているのだろう。

21. は、16と同じように Ma’am と表現されているがニュアンスは大きく異なっている。この例文の he は女王の夫である Philip 殿下のことである。「1952年の即位以来、夫である Philip 殿下は妻である女王に対して、人前では ma’am と呼び、彼女が部屋に入って来る時にはいつでも会釈するようにと義務づけられていた」と記している。女王は夫を Prince Philip と呼んでいると書かれていたが、別の呼称もいくつかあるように思える。『ロングマン英和辞典』で ma’am を引いてみると、「女王・王女・目上の女性に対する呼びかけとして用い「女王様」「王女様」などを意味する」と記されている。

例文21は、Philip Eade の記事である。

22. は、9、14と同じく the queen と表現されている。The queen and Prince Philip で位から当然、女王・夫の順番となる。記事では「女王と Philip 殿下が大衆の圧力に屈しロンドンのダイアナの記念物を訪れる」と書かれている。Succumb to という表現を用いて大衆よりの立場でとらえている。少し扇情的な表現である。ダイアナ妃がフランスで不慮の事故で死亡してから少し経過した頃に書かれた Robert Lacey の記事である。

23. は、Elizabeth と表現されている。女王の好きな動物として corgi 犬と pony があがっている。バッキンガム宮殿の外で女王が情熱を傾けるものである。Caitlin Dickson の記事である。

24. は、Her Majesty と the queen と表現されている。「女王陛下の株式会社」というのはイギリス王室は広大な私邸（スコットランド北東部の Grampian 州にある Balmoral 城や Norfolk にある Sandringham Estate(House) などを所有していることから大資産家であるということである。王室の存続については紆余曲折があり、現在は王室支持率は高いが、「女王と夫である Philip 殿下は近年の壮麗な式典にもかかわらず、名ばかりの「臣民」であるイギリス国民の許しを経てのみ、王室は存続しているのだということに気付いている」と書かれている。女王も Philip 殿下もイギリス国民との絆や信頼の大切さを大いに自覚しているのである。Tom Sykes の記事である。

25. は、Culture Queen と the most recognizable woman in the world と an endless source of inspiration と Elizabeth と an unexpected cultural icon と表現されている。英語で「culture minister（文化大臣）」という表現があるが、美術・文学・音楽などの文化活動を推進している大臣のことである。女王もその活動に積極的であることから、「文化女王」と称せられるのだろう。また「世界ですぐにあの方（女王）だと分かる女性」でもある。また「尽きることのないインスピレーションの源」と記されている。「映画からファッションや芸術にいたるまで、女王は思いもかけぬ文化の象徴である」と記されている。Unexpected という単語を用いた理由は、王室のイメージは伝統を重んじる旧態然としたものであると一般大衆は考えがちであるが、ファッション一つを取ってみてもファッション界をリードしていると言えるのではなかろうか。女王を形容する言葉も肯定的で、文化面における貢献を大いに評価している。例文の25と26は、Robin Givhan の記事である。

26. は、the queen と a central figure in the history of a country と表現されている。「女王は一国の歴史において中心人物である」と書かれている。国民の心の支えとなり、正しい国の道しるべとしての役割をきちんと果たしているからこのように命名されていると思われる。

27. は、Your Majesty と Ma'am と表現されている。この例文では、女王と初めてお会いした時に何と言えば良いのかという答えである。初対面の時:「Your Majesty（女王様）」

と呼びなさい。その後：「Ma'am」と呼びなさいというように説明されている。簡単な挨拶の仕方であるが、初対面の時には Her Majesty でも正しい。女王に招待され、仮にくつろいだ場であったとしても、日本人は女王に対して ma'am という表現はなかなか使えないのではなかろうか。例文の27と28は、Abby Haglage の記事である。

28. は、the queen と Elizabeth と表現されている。この例文はアメリカ大統領夫人である Michelle Obama が 'Never Touch the Queen' という social rule を破ったのが原因で記事となった。「2009年に Michelle Obama が女王の背中に手をかけたときに見物人が衝撃を受けた。しかし彼女を弁護して言うと、女王の方が先に大統領夫人にそうしたので」と記されている。2007年には、Bush 大統領が大胆にも乾杯の時に女王の方を向いて軽くウインクしたり、Mickey Rooney が 'No Touch' rule を破って、厚かましくも女王の手にキスをしている。幸いにして、女王はもちろん手袋ははめていた。いかに英語が堪能でも、隠れた社会的な規範などを見逃すこともよくあるので、英語学習者は特に気をつけなければいけない。

29. は、the queen と an artistic inspiration と表現されている。「女王は良かれ悪しかれ芸術的なインスピレーションを与える人物である」と記されている。文化的な面と同様に芸術的な面においても、女王が影響力のある人物（着想の源）であることは否定できない。例文の29と30は、Blake Gopnik の記事である。

30. は、Queen Elizabeth II と the most portrayed public person in history と表現されている。「(女王)エリザベス2世は歴史上最も肖像画を描かれた公人である」と記されているが、確かに女王在位中に129回も肖像画を描かれている。イギリスでは紙幣や硬貨でも女王が描かれているが、やはり年とともに絵になる人物と言えるのではなかろうか。

31. は、the commander in chief of all armed forces in the U.K. と表現されている。「女王は、イギリスの陸・海・空軍を含むすべての軍隊の最高司令官である。宣戦・和平布告は女王の名において執り行われる」と記されている。女王は国の要であるが同時に重い責任を背負っていて、いざという時に良識ある判断が必要になるということがわかる。イギリスで「sense of proportion（バランス感覚・中庸の精神）」が大切な資質の一つとしてよく言われるが、その通りだと感じられる。例文の31から33は、Abby Haglage と Jacqueline Williams の記事である。

32. は、Her Majesty と表現されている。女王が女性なので Her Majesty となっているだけで、国王が男性ならば His Majesty になる。意味的には Your Majesty と全く同じである。「女王がランカスター公爵とノルマンディー公爵の肩書も有している」と記されているが、英語の専門家でも意外とその事実を知らないのではなかろうか。

33. は、the only British monarch in history properly trained to change a carburetor と表現されている。イギリスは constitutional monarchy（立憲君主国）であり、女王はイギリスだけでなくイギリス連邦の元首でもある。「Properly trained to change a carburetor」

は、一つのたとえではあるが、文字通り「エンジンの気化器をきちんと取り換えることのできるように訓練を受けた」歴史上唯一のイギリス君主（女王）でもある。女王が10代の頃に girl guide や sea ranger として操船技術などの訓練をきちんと受けているので単に事実を述べているだけである。イギリスでは週末になると、ご主人が D.I.Y.(do-it-yourself) store に出かけ、壁紙を張り替えたり壁にペンキを塗ったりする光景をよく目にすることがあるが、女王もいざとなれば油まみれになりながらでも気化器を取り換えられるとは驚きである。女王が庶民の目線で物事を考え・判断できる理由は、若い頃にガールスカウトなどに参加し、奉仕の精神を培ってきたからだと思われる。

まとめ

エリザベス女王を指し示す言語表現を順番に列記し解説を加えた。特徴として最上級を用いている言語表現（例文の番号10、12、13、14、25、30）や意味的に「一番の･最高の･中心的な・唯一の」を意味する形容詞を名詞の前に置いたり（例文の番号8、9、26、33)、「～において」という限定的な句を後置し女王を強調するような言語表現（例文の番号10、12、13、14、25、26、30、31、33）などが見出された。女王を指し示す queen だけでも、様々な variation（変奏）があり、番号順に並べてみると、以下のように10通りもの表現が散見される。

the Diamond Queen
Queen Elizabeth II
this queen
our queen
the queen
the 86-year-old queen
queen
a smiling queen
Queen Elizabeth
Culture Queen

同様に Elizabeth だけでも、3通りの言い方がされている。

60 Years of Elizabeth II
Queen Elizabeth II
Elizabeth

Monarch だけでも、3通りの言い方がされている。

the first reigning monarch

the longest-lived monarch
the only British monarch in history properly trained to change a carburetor

Majesty だけでも、2通りの言い方がされている。

Her Majesty
Your Majesty

女王に対する呼びかけの例として、2通りの言い方がされている。

Ma'am
Your Majesty

上記の queen, Elizabeth, monarch, Majesty などの単語を用いていない言語表現を以下番号順に列記する。

this tiny octogenarian
its first lady
the supreme governor of the Church of England
the most famous woman in the world
the most media savvy in history
the boss
the single most powerful person in the land
the most recognizable woman in the world
an unexpected cultural icon
a central figure in the history of a country
an artistic inspiration
the most portrayed public person in history
the commander in chief of all armed forces in the U.K.

以上の例文のように、エリザベス女王を指し示す言語表現がたくさんあるということは文体論で言うところの lexical density が高いということになる。

イギリスの Wimbledon において、毎年６月にプロのテニス選手権（全英オープン）がおこなわれているが、その試合の模様を伝える新聞記事を詳しく分析してみると、男子選手を例にとれば、強い選手として世界的に有名なマレーやフェデラーやジョコビッチやナダルなどを指し示す言語表現は多様で variation に富んでいて、lexical density が高い。それに比べて、彼らの対戦相手でそんなに強くなく有名でもない選手はほとんど変奏がなされていない。エリザベス女王を指し示す言語表現が豊かであるということは、それだけ女王が世間から注目されている証拠でもある。

Newsweek 誌はアメリカで出版されたものである。アメリカ英語の用法はイギリス英語の用法と少し異なるところがあるように思えた。例文3の this tiny octogenarian（この小

柄な80代の人）という表現や例文14の the boss（この上に立つ人）という表現や例文16の Ma'am はぶしつけで非礼な感じがする。Tiny という単語とあまりにもくだけた boss という単語は、女王を指し示すことばとしてはあまりにも相応しくないような気がする。それから、女王を first name の Elizabeth で呼ぶのは、親しみを出すための表現かもしれないが、日本では皇室の方を新聞紙上や雑誌などで、first name で呼ぶことは考えられない。

イギリスが健全な国家として機能しているのは、エリザベス女王の存在を抜きにしては考えられない。エリザベス女王の人気の秘密は、謙虚なお人柄とユーモアセンスとバランス感覚を併せ持っていることである。粘り強く平然と業務を遂行されている。女王はイギリス王室を旧態然としたものでなく、reinvented（作り変え）、reenergized（活性化させた）と Newsweek の幾人かの書き手に評価されている。例文9で解説したように、女王は宗教に対しても寛容で、柔軟な姿勢を世界に示している。宗教の違いから宗教戦争が勃発しているという歴史の真実を考える時に、女王の果たしている役割は大きい。イギリス社会の安定の礎を築き、文化面や芸術面やファッション界において牽引し、さらに発展させている人物こそ、世界の真のリーダー的存在であるエリザベス女王に他ならない。

その意味では、エリザベス女王はイギリス国民にとって、国家の進むべき正しい道を教え導く guiding star と言えるのではなかろうか。

参照文献

Bennett, Alan. (2007) *The Uncommon Reader*. London : Faber and Faber.

Cooper, Jilly. (1979) *Class*. London: Eyre Methuen.

Fox, Kate. (2004) *Watching the English*. London: Hodder & Stoughton.

Nevinson, H.W. (1928) *The English.* London: Routledge & Kegan Paul.

Newsweek. (2012) *The Diamond Queen 60 Years of Elizabeth II*. New York: The Newsweek/Daily Beast.

Pears, Sam. (2012) *Elizabeth–The Queen*. London: The Chelsea Magazine.

Townsend, Sue. (1992) *The Queen and I*. London : Methuen.